単身高齢者の家族関係とインフォーマルサポートの変容

○　北星学園大学大学院　　畠山　明子（会員番号　7568）

キーワード：単身高齢者・家族関係・インフォーマルサポート

１．研 究 目 的

本研究は、単身高齢者のインフォーマルサポート資源としての家族との関係はどのようにして変化してきたのかに着目した先行研究レビューから論点整理をおこなった上で、家族関係とインフォーマルサポートの関係性について、事例を通して明らかにすることを目的としている。

２．研究の視点および方法

今日、わが国でも女性の経済力の向上にともない生涯独身でも生活できる安定を得たことや社会的インフラが整備され一人暮らしの不自由さが減少したことなどから、高齢期の単身生活が選び取られることが多くなった（安達,2002）といわれている。高齢者が単身生活となる要因として、人口構造の転換にともなう社会的な要因と離別や死別、さらには生涯未婚であるなど配偶関係の選択や自立志向にともなう個人的な要因が関連している。しかし、高齢期の単身化が進む一方で、近年の高齢期の転居理由として、年齢が上昇するにつれて、晩年型同居が増加している。いったん家族と離れた高齢者が、再び家族との関係性の中に移行する動きも見られる。

1980 年代以降の研究は、子どもとの同居率の低下にともない、社会関係の範囲をごく近しい血縁者としての家族だけでなく、きょうだいなどの親族や近隣住民、友人などとの関係を含んで捉えている（安達,2010）。家族社会学の分野では、人間関係の構造が家族関係を中心とした「家族ネットワーク」から、個人を単位とする「パーソナルネットワーク」へと転換した（岩渕,2009）と指摘される。海外では、研究数としては多くないが、孫、おいやめい、さらにはいとこも親族として取り上げられ（Gordberg ら,1986、Brubaker,1990 など）、単身高齢者サポートの担い手として期待されている。さらに、サポートのパターンが類型化され、家族は、課題特定モデル（Litwak ら,1969）では介護や看病の際のサポートとなり、階層的補完モデル（Cantor,1979）では最初に登場するセクターとなっている。家族は高齢者の社会関係の基本として組み込まれていることは多くの研究において一致をみている。そして近年では、「呼び寄せ老人」に代表される同・近居や別居子が老親の元を訪れる「通い家族」を通して、単身高齢者と子どもとの関係の再構築が注目されている（鈴木,1999、川上 2001）。

本研究は、単身高齢者と家族関係に関する研究動向と事例調査によって得られた結果と配偶者との死別、子どもとの別居に加え、家族周期外にある単身高齢者の今日的な急増現象から、インフォーマルサポートによる支援の課題を考察する。なお事例は、旧産炭地 X 市に居住する女性単身高齢者に半構造化インタビューをおこなった結果をもちいる。

３．倫理的配慮

本研究発表は、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づき、事例対象者を特定できないよう匿名化している。調査開始時、対象者と研究の趣旨、プライバシー保護および録音の同意について記した承諾書を交わし、事例発表の承諾を得ている。

４．研 究 結 果

単身高齢者と家族関係をめぐる課題を捉えるうえで重要となる視点は、人口転換にともなう家族形態の変化である。報告者の調査では、対象者が入院治療等を要する場合、市内外にいる別居子がサポートを提供していることや市内に居住する別居子や兄弟姉妹の日常的な交流を維持していること、子どもや兄弟姉妹（配偶者側の関係性も含む）家族を基本とした関係を取り結んでいることが明らかになった。近隣や友人関係については、維持もしくは喪失しているそれぞれのパターンが見られ、近隣住民との関わりがある場合には家族以上に情緒的サポートを提供する存在ともなりえていた（畠山,2009)。対象フィールドとした旧産炭地の X 市では今後さらなる高齢化と人口減少により、子どもの数自体も減少しさらに別居も進むことから、単身高齢者のインフォーマルサポートの再構築が求められてくる。さらに、今後は未婚者や子どもを持たない高齢者が増加するなど、家族のあり方そのものが変化する少子高齢社会を迎える。家族との関係は永続的である（富樫,2007、古谷野,2008）とされてきたが、家族のあり方そのものが様変わりを始めている今日の日本社会において、永続的な家族との結合関係自体に変化が見られるようになるのではないだろうか。従来の研究で指摘されてきたことは、多くの家族がおこなってきた介護・病気時のサポートの重要性である（須田,1986、石田,2000)。しかし、家族不在時の担い手の問題については明確にされてこなかった。ここで「高齢者、とりわけ単身高齢者のケアを誰が担うのか」という問いが現代的な問題として浮かび上がる。単身高齢者のインフォーマルサポートには、日常的な交流・緊急時のサポートの担い手として近隣住民や友人などの地域社会における非親族の役割が大きいことも明らかにされている（浅川,2008 など)。今後の課題は、家族機能の脆弱化や家族不在といった家族形態の変容を踏まえた単身高齢者のインフォーマルサポートの機能と構造を実証的に明らかにしていくことである。

（本報告は、財団法人日本興亜福祉財団平成 22 年度ジェロントロジー研究助成事業による成果の一部をなすものである。）